

ナルニア国物語

第1章 ライオンと魔女

製作年:2005年

製作国:アメリカ

監督:アンドリュー・アダムソン

製作:マーク・ジョンソン

出演:ウィリアム・モーズリー、アナ・ポップルウェル他

配給:ブエナ ビスタ インターナショナル(ジャパン)

昨年、「誕生日に何をしたい?」と妻に聞かれました。私が49歳の誕生日にしたかったのは、「ナルニア国物語」(第1章ライオンと魔女)を見ることで、米国での封切り日は、たまたま誕生日の翌日でした。40年前に(嘘みたい!)初めてナルニア国物語を読んだから、私は大のナルニアファンになりました。以来、何度も再読し、子どもたちが4、5歳になると読み聞かせました。それで、前売り券を求め、良い席で見ようと早めに映画館に行きました。

英国の作家、哲学者であるCSルイスの書いたナルニア国物語は、どこにでもある児童書ではありません。この7巻シリーズは、29のことばに訳された、9千万冊のベストセラー、またロングセラーです。「ライオンと魔女」は、トルキンの「ロード・オブ・ザ・リング」と並び、タイム誌をはじめ多くのベストセラー・リストに載っています。おとぎの国、もの言う動物たち、架空の生き物の登場する物語は、子どもに愛され、大人もとりこになります。

このシリーズが聖書の物語の寓話であることに、読者はすぐ気づきます。天地創造に始まり、キリストの十字架と復活に移り、ハルマゲドンの戦いで終わります。霊的な真理と信仰のレッスンが強烈に伝わりますから、家族で読むにはもつていいと言えます。

「ナルニア国物語」は、これまでも低予算でアニメ化またドラマ化されてきましたが、本編で「シュレック」の監督アンドリュー・アダムソンは、ウオルデン・メディアやウォルト・ディズニー映画会社と協力し、「ロード・オブ・ザ・リング」と肩を並べる作品、原作に忠実でありつつ健全な娯楽

作品にしようと思いました。結果はどうでしょう。

小学校低学年のための娯楽としては、良くできています。時にこわい場面や戦闘シーンなどもあり注意はいるものの、それも「ロード・オブ・ザ・リング」ほどではありません。多少の例外を除いて、原作にも忠実です。アスランの死と復活は、イエス・キリストの死と復活を子どもたちといろんな場面で話すきっかけを与えてくれます。その意味で、親や教会学校教師は、未信者の子どもを誘って映画を見に行くといいでしょう。

個人的には、これが「ロード・オブ・ザ・リング」の前に出なければと思いましたが、「ロード・オブ・ザ・リング」を見てしまった大人や10代には、音楽、特殊効果、演技、また全体的なインパクトなどが劣ります。でも、見る価値がないことはありません。続編の「カスピアン王子のつるぎ」では、アダムソン監督も面目をほどこしてくるでしょう。

もうひとつ嬉しいことは、ディズニーが、家族向け娯楽へと大きく舵を切ったことです。ディズニー所有の映画と音楽で、性と暴力を使い恥ずかしげもなく利益追求に走った前社長のマイケル・アイズナーは、すでにその地位を追われしました。「新しいディズニー」は、キリスト教信仰を嫌悪する態度を改め、提供する娯楽に家族の信頼を回復しようという意図が明らかです。「ナルニア」・「グロリー・ロード」・「バイレツ・オブ・カリビアン・デッドマンズ・チェスト」(この夏日本で公開予定)などの最新作を見ると、その努力は成果をあげたようです。

(FFJ代表 テモテ・コーレル)